HOKKAIDO ROKUBIKEN

北海道鹿美健の挑戦 前編

令和のニュービジネス最前線

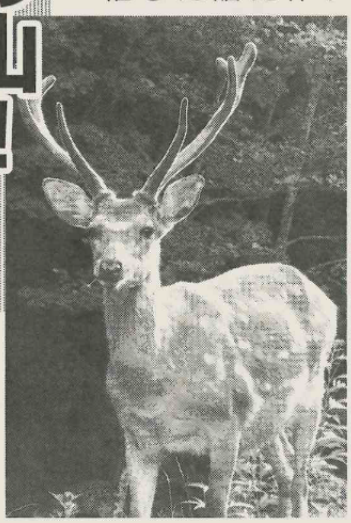
北海道鹿美健 代表取締役
薬学博士 鄭権（ていけん）氏

1994年に中国吉林農業大学生薬学部卒業。その後、留学生として来日。2004年に東邦大学大学院薬学研究科生薬学教室の博士課程を修了し薬学博士に。現在は帰化し、北海道鹿美健をはじめ複数の会社を経営している。

ここに宝の山！ 増え続けるエゾシカ 骨や皮を生薬素材に

増え過ぎているエゾシカの捕獲量は年間12万5000頭にものぼる。こってみると、『エゾシカのうち食肉になるいないのか』と驚きましたのは18％。まさに、宝の持ち腐れです。『これはもったいない。やるしかない』と、改めて決心しました」

現地のハンターや鹿の解体施設は、エゾシカの骨や皮は産業廃棄物として処理をしていた。宝物なのに経費をかけて処分しているのである。しかも、北海道なので100㌔以上も離れた産業廃棄物処理場に持っていかなければならない。それが、ハンターやエゾシカの解体施設にとっては大きな悩みになっている。加えて、夏場はヒジがわいてニオイもキツく、地元にとっても頭の痛い問題だったのだ。



しかし、エゾシカの骨や皮を生薬素材にするのは一筋縄ではいかない。様々な加工施設を回ってお願いしても、なかなか応じてくれない。

「『今までも同じようなことをやろうとした業者がいくつも来た。だが、間違いなく失敗していく冷たい対応でしたね」

協力してもらったとしても、解体した肉や皮、骨を冷凍して品質を保つために冷凍コンテナの設備投資をしなければならない。電気代も1つの冷凍コンテナで1カ月に10万円かかる。問題は山積みだ。果たして、鄭権社長はどうやってエゾシカから生薬素材をつくり出すことに成功したのだろうか。

（次回に続く）

頂点ともいえる代表的なもので、『全身が宝』と古来中国ではいわれています。中国では野生鹿は稀少で、1級保護動物に指定されています。ところが、日本では増え過ぎて害をもたらす動物になっている。中でもエゾシカは捕獲量が最も多く体も大きい。『エゾシカに興味がないか』という話を振られた時に、すぐに『あります！』と即答しました」と、同社の鄭権社長は話す。

北海道で増え過ぎてさまざまな被害をもたらしているエゾシカを生薬の素材に加工し、日本国内はもちろん、中国やアジア諸国を相手にビジネスを展開して成功している企業がある。北海道新ひだか町の廃校を借り、そこを生薬素材工場にしている「北海道鹿美健」という企業である。

「鹿は動物の生薬素材の